

『学会開催報告』

日本生理人類学会第68回大会

The 68th Biannual Meeting of Japan Society of
Physiological Anthropology日本生理人類学会第68回大会 大会長
(金沢大学医薬保健研究域医学系運動生体管理学)

藤原 勝夫

2013年6月8日(土)・9日(日)の両日、金沢大学医学部十全講堂・記念館等において、日本生理人類学会第68回大会を十全医学会の後援をいただいで開催させていただきました。本学会の北陸での大会は、初めてとなります。

生理人類学は現代に生きる私たち自身についての人類学であり、人間生活の質の向上に直接かかわる科学です。これまで人類は、科学技術を発達させ、高度な文明を創り出し、地球の生物界では他に例を見ない繁栄を誇っています。今後もこの繁栄を維持するためには、人間の特性を真に解明し、科学技術をこれと矛盾しない方向へ発展させる必要があります。

生理人類学は、「環境適応能」「テクノ・アダプタビリティ」「生理的多型性」「全身的協働」「機能的潜在性」をキーワードとして、ヒトの生理特性について、時間軸と空間軸の視点をもちながら解明することを目的としています。

この大会では、高橋正紘先生(めまいメニエール病センター長)による公開特別講演を設け、「脊椎動物の平衡制御、原理と盲点」と題してお話をいただきました。高橋先生の御専門である“めまい”について、進化上の起源などを視座にすえた興味あるお話を伺うことができました。

また、人類学関連学会協議会・合同シンポジウムとして「人間の姿勢とロコモーション様式の特徴」を開催しました。日本霊長類学会、日本文化人類学会、日本人類学会、日本民俗学会、日本生理人類学会から推薦されたシンポジストの先生方に、一側優位性などについて、身体と文化の両面から論じていただきました。多くの研究者にとって、研究の視点を広げることができる有意義なものとなりました。

この他に、学会会員を対象にシンポジストを公募し、「脳の活性化」と題するシンポジウムを設けました。このシンポジウムでは、若手研究者4名に登壇いただき、頸部前屈姿勢の保持による脳賦活作用、他者行為の観察時に生じる脳のミラーシステム、注意分散による脳の活性化と姿勢制御、高齢者における頸部前屈姿勢でのアンチサッケード訓練による前頭葉機能の改善について最新の研究成果を紹介していただきました。

一般演題は、77演題(口頭発表42演題、ポスター発表35演題)という多数の申し込みがありました。ポスター発表の会場は、多くの方に参加していただけるよう口頭発表会場内と懇親会会場横に設けました。すべての発表に対して休憩時間を惜しんで質疑・応答を行うほどの充実したものとなりました。



人類学関連学会協議会・合同シンポジウム
「人間の姿勢とロコモーション様式の特徴」



ポスター発表会場